

○機を捕ふる力

機を捕ふる力は、凡べて活きたるものを相手とする仕事に於て、最も肝要なる秘訣である。此の力を有するものは、常に成功し、此の力を有しないものは常に失敗する。教育に於ても尙同様である。否、教育に於て殊に然りと云つてよい。

吾人は、教育の一定の法式と順序とを知らないではない。且つ又教育の計畫を立案し準備するに於て、必ずしも怠つて居るものではない。しかも、此の教育の法則を適用し、此の計畫を履行するに際して、吾れながら驚くべく機を捕ふるの力が無い。露骨な言葉で以て言へば、驚くべくうっかりして居る。ぼんやりして居る。敢て不忠實だからではない。敢て他事に心を奪はれて居るのでもない。そんな爲であつたら、それは何と申譯もない道徳上の罪である。まさかにそうではないと自分では思つて居るけれども、兎に角く事實上うっかりして居る。而して其の間に、必ずや幾多の貴重なる教育上の好機會を逸し去つて居る。我れながら遺憾に堪えないことである。(倉橋生)

曙

ジャン・クリストフは御祖父さんと一緒に教會堂にある。クリストフは退屈してゐる。餘まり樂ではない。動くと言ひつつかつてゐる。會衆はクリストフの解らない言葉を一緒に云つたり、一緒に黙つたりする。會衆は皆鹿爪らしい陰氣な顔付をしてゐる。餘處ゆきの顔をしてゐる。クリストフはこぼれ會衆を眺めてゐる。彼の直ぐそばに腰かけた阿婆さんのリナは意地の悪い様子をした。をり／＼これが御祖父さんだとは思へないこともあつた。クリストフは薄氣味悪い。そのうちに慣れて、何うかして退屈を紛らさうとしてゐる。彼は身體を揺つたり、頭を曲げて天井を見たり、遮面をしたり、御祖父さんの着物を引張つたり、椅子の藁を調べて指で穴をあけやうとしてみたり、鳥の轉りを聴いたり、頭が外づれるやうな大欠伸をしてゐる。

俄に音響が瀧のやうに響いた。オルガンを弾いてゐる。戦慄がクリストフの脊筋を走る。彼は椅子の脊中に頤を載せながら振り向く。大そう大人しくして居る。彼には此の音響がさつぱり解らない。そして何の意味やら解らない、その響は目を眩うまし。頭を掻き亂して、もう何物も聴き分けることも出来ない。併し好い心持だ。一時間以前から退屈な古い會堂のぎごつちない椅子に、もう坐つてゐないやうな氣持がしてゐる。鳥のやうに